

---

# 10代ボンゴレファミリー解散？！

M3

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

10代ボンゴレファミリー解散?!

### 【Nコード】

N4318V

### 【作者名】

M3

### 【あらすじ】

…夢をみた…彼はほんとうに、あのボンゴレ?世なのか?

10代ボンゴレファミリーに過去最大の危機が迫る!!

## ボンゴレファミリー（前書き）

私の第1作目「ボンゴレ？世の決意」の続きとしてみてもいいですし、新しくみて頂いてもOK！（任せます。  
これを見てきつかけに、作品の数々をみて頂けたらこれ幸いです！  
ではどうぞ！（）／

## ボンゴレファミリー

巨大マフィア「ボンゴレ」

その10代目ボンゴレファミリーのボスが沢田綱吉という青年だ。普段は弱々しく虫も殺せない頼りない、優柔不断な彼だが………並盛のため、仲間のため、ひとたび死ぬ気のオレンジの炎を額・手の甲に宿すと敵なしの強い力を持つ

ボンゴレ？世は、<sup>デーチモ</sup>眉間にシワを寄せ、祈るように拳をふるう

温かく仲間を包む大空

これが沢田綱吉という男だ。

そんな、ボス・沢田綱吉を守る優秀な守護者達も、代々ボンゴレは受け継がれている。

常に攻撃の核となり、止まることのない怒涛の攻撃…嵐の守護者  
獄寺隼人。彼は沢田綱吉の右腕でもある

すべてを洗い流す鎮静の雨、剣豪…雨の守護者 山本武

ファミリーを明るく照らす日輪…晴の守護者 笹川了平

決して誰とも馴れ合わない孤高の浮き雲…雲の守護者 雲雀恭弥  
彼はボンゴレ最強の守護者ともうたわれている

臆病者だが、激しい一撃を秘めた雷電、雷の守護者ランボ

嘘の中に潜む真実、真実の中に潜む嘘…実体のつかめぬ幻影、霧の  
守護者 六道骸

これが、10代ボンゴレファミリーである。

初代ボンゴレファミリーボス・ボンゴレ？<sup>ファミリーモ</sup>世ジヨットと似ている沢  
田綱吉だが、獄寺をはじめとする守護者達も、初代各守護者に類似  
している。初代ボンゴレファミリーの再来かとも言われている……。

正式に継承した当初こそ、平和主義者の沢田綱吉に反感をかうものは多かったが、守護者達がうまくまとめ上げてきた……

10代ボンゴレファミリーの絆は強い！

周りは完全に彼らの力に魅力されていた…彼らこそ、“過去ボンゴレ最強ファミリー”だと、

そう思っていた…

## 日常

「ツツくん！」

「ツナさん！」

「京子ちゃん！ハルも、久しぶりだね。」

「ツツくん久しぶり！日本に帰って来てたんだね！」

「うん。2人とも高校の帰り？」

「はい！これからケーキ食べに行くんです！」

「あははは…相変わらずだね」

ツナたちも並盛中を卒業し、高校生になった。今は冬のため、高校2年とももうすぐさよならになる。

ツナたちはボンゴレのこともあるため、平日中は学校、休日はほとんどボンゴレのことで忙しい。ツナの希望で、10代ボンゴレファミリーの拠点は並盛になっているため、休日はイタリアにあるボンゴレ本部に、ローテーションで様子を見に行くことになっている。今回はツナだったのだ。

「お兄ちゃんが、日本に帰ってきたらアジトにきてくれて言うてたよ?」

「そっか!わかった。ありがとう。京子ちゃん」

「ツナさん!行ってらっしゃいです!」

「頑張ってるね!ツツくん」

「うん。またね」

ボンゴレ地下アジト



「お帰りなさい。十代目。」

「ツナ、お疲れさん！」

「うん。ただいま………地下アジトの工事かなり進んできたね！」

「再来年頃にはほぼ完成が予定されてるそうです。」

「そう。楽しみだな」

「沢田、京子に会ったのか」

「はい。たまたま道端でバッタリだったんですけど………話があると  
か」

「おう！そうだった。雲雀の部屋に行くぞ」

「雲雀さんの部屋に？」

日常？

雲雀の部屋

.....

「雲雀！入るぞ！」

「.....。」

「こんにちは。雲雀さん」

「やあ。沢田綱吉」

「話ってなんですか？」

「休日にローテーションでいま本部を見に行ってるけど、もうやる  
必要ないから」

「え？」

「なんでだ？」

「それはだな！山本、“俺達”がこれから本部を見れるようになるからだ！」

「俺達つて、お前と雲雀がか？」

「そつだよ。獄寺隼人」

「そつか！獄寺くん、2人とも高校卒業だから……」

「?!」

そつ、次の春でツナ達は高校3年生になる。世は受験生というものだが、ボンゴレのことがあるツナ達は大学受験をしない。事実上、ボンゴレという名のマフィアに就職ということになる……。

雲雀と了平はツナ達の一つ上のため、今年で高校卒業という形になる。学生でなくなるため、自由にボンゴレ本部に足を運べるということだ。

「極限！ボンゴレ本部は俺と雲雀に任せて、お前達は残り1年の高校生活を楽しんでおけ！」

「ありがとうございます。けど、雲雀さんもお兄さんも大学はいいんですか？ボンゴレに気を遣ってるようなら…」

「俺の頭じゃどうせ極限どこも行けんからな」

『この人言い切っちゃったよ！』

「大学なんて…人が群れかえってる中になんでわざわざ自分から行かなきゃいけないの」

『この人相変わらずだな！』

「そうですか。じゃ、これから本部は任せます。よろしくお願います！………そういえば、骸は？」

「ああ、極限寝てるらしい」

「骸寝てるの?!まだ夕方だよ?!早くない?!」

「早いんじゃないかって遅いんだよ」

「?..?」

「どっつやら骸のやつ、朝と夜がひっくり返ってるらしいぞ」

「あははは！ホントにムクロウになっちまったのな」

「……うまくねーよ」

「でも、なんで？夜に何やってるんだろ、骸の奴…なんか、調べてんのかな…」

「ンンン」

「骸、骸。」

「…ん…………沢田綱吉ですか？」

「うん、俺だよ。骸、今入って大丈夫か？」

「…………ぞ」

「すみませんね。こんな格好で」

「いや…………こっちこそ寝てる時に…………お兄さんから、骸の生活が朝と夜逆転してるって聞いたから…………」

「…………ええ、まあ…………」

「1人であまり無茶しないで。…………なんか力になれないか？」

## 夢

「クフフ…そのような心配は無用ですよ、沢田綱吉。これは僕個人が好きで動いていること……あなたには関係ありません」

「そうか。わかった！じゃ何も突っ込まないから……なにかあったらいつでも言って」

「……………ええ。分かりました」

「じゃ、お休み」



~~~~~

んな  
.....  
み、  
んな  
.....

ツナ  
…

じゅ  
…十代目  
…

沢田！

沢田綱吉

.....。

早くっ！お……俺、を……早くっ

倒せ！

何を……

十代目！な、

?!

俺を……倒せ!……早くっ!!

何言ってるんだよ!ツナ…!



山本

獄寺

もう……い、やなんだ……俺を……早く！

骸

雲雀

ランボ

笹川

早くっ！俺、を！……………殺し……………

ガバッ

「「「「「？！」「」「」

「……………なんて夢だ……………」

「ツナ…?」

「今の夢はなんだ?」

「……………」

「……………嫌な予感がしますね……………」



## 予兆

「今朝の夢はなんだったんだ…」

嵐の守護者、獄寺隼人は今朝見た夢のせいで早く起きてしまった…  
しかも、目覚めも悪い。重い瞼をあけて、いつものミーティング室  
の扉を開ける。するとそこには……

「おっす！獄寺。」

「山本！早いじゃねーか」

「俺だけじゃないさ…」

「?!」

辺りを見ると、了平、雲雀、骸までもいる。これはどういついづことな  
のか…

「なんで…」

「君も見たんでしょう？獄寺隼人……あの夢」

「?!雲雀…」

「獄寺、ここにいる全員見ているのだ…」

「しかも、全く同じ夢らしいぜ」

「っ!…」

「ここにいないという事は、沢田綱吉は見ていないらしいですがね………」

「守護者だけってことか………」

「どう思ってたんだ？獄寺」

「……………。なにかが起こるのだけは確かだ」

「クフフ……同感です。これは予兆ですね」

「骸……」

「君たちだけならともかく、術士のこの僕の眠りを妨げる夢を見させたのです……気に入りませんね……ただせさえ最近睡眠不足だといふのに」

「それは貴様の都合だろう。骸」

「聞き捨てならないね……僕だって途中で起こされて機嫌が悪いんだ。」

「雲雀……お前はいつもだろ……」

「骸、術士だというなら……今回のこの俺達の見た夢、どうみる。」

「クフフ……。いつになく落ち着いてますね……獄寺隼人。……意図的に“何者”かが見せているにまず間違いないでしょうね」



「その“何者”が誰かわからんのか？骸」

「……………」

「骸……………」

「……………此処だけの話をしましょう。」

## 霧の守護者

「実は最近妙な噂があります」

「「「「？」「「「」

「霧の属性集団”が動いている…と。」

「「「は？」「「「」

獄寺と山本、了平は思わずひよんな声を出してしまった。…霧の属性集団って…

「これはそんな簡単な話ではありませんよ」

「お…おつ。すまん…ついな」

「全員が霧の使いのスペシャリスト…そんな集団が、いま少しずつですが他のマフィアを荒らしていると聞きます。」

「なに?！」

「やっぱり霧の術士は嫌いだな。」

「おやおや、雲雀恭弥…この僕に喧嘩をうっているのですか?」

「やるのかい? いいよ…噛み殺してあげる」

「おい雲雀…話を反らすなよ! 骸、続き続き!」

山本はすぐさま体裁に入る。さすがは鎮静を特徴とする雨の守護者…

「クフフ…いいでしょう。その霧の術士集団の狙いは定かではありませんが、分かっていることが1つ」

「「「?」」」

「必ず、大空の属性が狙われていることです」

「なっ！大空……」

「…っ！！十代目……」

「そう、沢田綱吉は大空の属性、しかも初代ボンゴレ？世の血を濃く受け継いだだけあってその質は高い。」

「なんと！沢田の危機ではないか！」

「…骸。」

「？」

「霧の属性集団についてもっと詳しく調べてくれ……お前のことだ、向こう側を感じられるなんてへましねーだろ。」

「クフフ……。みくびらないで頂きたいですね……いいでしょう。獄寺隼人。」

「やけに素直ではないか。骸。」

「クフフ……。彼らのせいで霧の術士に汚名付けさせられては適い  
ませんからね……。今回は力を貸しましょう。」

「頼む。……俺達は何もするな、下手に動いて骸の邪魔したくね！」

「

「！OK」

「むじ」

「それから雲雀」

「……。」

「並盛の監視の強化だ」

「………君に言われるまでもない」

「俺達は十代目の護衛だ。十代目に余計な不安は与えないからな、内密に動け」

「おい…獄寺…沢田に感づかれないするなんてかなり難易度高いぞ」

「相手は超直感の持ち主だぜ！」

「つべこべ言つな！」

……各自やることやれよ！解散だ」

## 連絡

「ん~~~~」

「どこかしましたか？十代目。」

「なんか……みんな、かたくない？」

「そうか？」

「極限気のせいだ！沢田！」

「そうかな？せつかくの昼食が……なんか……」

「わりいツナ！俺ちよっと出てくるわ！」

「え?!山本?!うん……行ってらっしゃい」

「つたく、忙しいヤローだ」

「まあまあ獄寺くん。……そういえば、最近さらに骸見なくなっただ

ね。雲雀さんまで」

「む、骸は黒曜らしいですよ？十代目。」

「そうなんだ。」

「雲雀の奴はどうせ並盛を歩き回ってますよ」

「あははは。みんな忙しいなあ〜」

「十代目はゆっくりなやつで下々さ」

「うむ、極限！周りのことは俺達に任せておけ！」

「…うん。ありがとう！」



りのー…

・みーどーりーたなーびくーなーみもー

「僕だけど」

『 『

「……うるさいな。いいから僕が言ったこと進めといてよ……“彼”  
曰わく時間ないらしいから」

『  
』

「さあ？知らないよ。そんなこと。僕は霧の術士集団を噛み殺せれば  
いいんだから」

『  
』

「切るよ。忙しいんだ」

「もしもし……骸か、どうだ？」

『クフフ…さすがは霧の術士のスペシャリスト達、といったところですかね。ガードがかたいですよ』

「そうか…まだ時間かかりそうか？」

『かかりますね。もう一週間ほど…ですか』

「構わねーさ。とにかく、土産さえあればな。慎重に頼む」

『分かりました』

「まったく…めんどうせーじやになってきざがった」

## シックファミリー

「まさか尻尾も出してこないとは…ナメてましたね、霧の属性集団を」

六道骸は獄寺隼人の依頼で霧の属性集団について調べていた…しかし、彼らの有力な情報はなかなか得られず、時間だけが過ぎていき、さすがの六道骸にも焦りが出始めていた…

「霧のスペシャリスト…ですかね…」

六道骸とお見受けする

?!

はじめまして…我々の名は

霧の属性集団“シックファミリー”

「……おやおや、そちらから出て来てくれるとは、願ったり叶ったりですね……」

なるほど…ボンゴレ10代霧の守護者、六道骸。噂通りの術士だ

「クフフ…お褒めの言葉は光栄ですが…そちらからわざわざこの僕に何の用ですか？」

我々と共に手を取らないか？六道骸

?!

我々は強い霧の属性の術士を集めている。  
六道骸よ、貴様ほどの力を持つ術士がボンゴレなどにくすぶって  
いるのは勿体無い……そうは思わないかい？

「クフフ…僕はボンゴレに取り込んであるわけではありませんよ。  
それに、何処にしようか……この僕の霧の力は変わりません」



貴様の霧の力…素晴らしいものだ。我々の上に行く！だが、ボンゴレにいては宝の持ち腐れ…我々と組めば、我々は貴様の下につくつもりだ。

「クフフフ…ハハハハッ！まさか霧の属性集団シツクファミリーとやらに勧誘されるとは思いませんでしたよ…実に面白い話だ」

どうする…六道骸よ。

「お断りしますね」

ほじっ…

「僕があなた方について、あなた方にはメリットがあるでしょうが、

僕にはない」

…メリットならある

?!

我々と共に、沢田綱吉を殺す

？

そして、沢田綱吉を砕いたあかつきには……巨大な霧の力を手に出  
来る

「巨大な霧の力……ですか」

そうだ……全てのを屈せられる巨大な力だ  
……共に組み、沢田綱吉を撃とう！六道骸よ……

……。



## 霧と雲

「やれやれ…厄介なことになりましたね」

六道骸は追い求めていた霧の属性集団、名を“シックファミリー”と交わした最後の会話を思い出していた。

.....

これ以上のことは貴様が我々と組んだら話そう。

「僕からボンゴレ側に漏れるとは考えていないのですか」

その心配はいらない。貴様があくまでボンゴレ側につくのなら、我々は我々のやり方で必ずや沢田綱吉を殺す。  
そして得られた新たな霧の力によって、世のマフィア全て潰し、マフィアの頂点にたつだけだ。

「言ってくれますね」



ゆるりと考える…六道骸よ…貴様の力が最も発揮される場所を。我々はいつでも歓迎する……

……

「はあ…なんてめんどくさい」

骸は千種のような言葉を吐きつつ、マジトに帰ってきた。

「骸！」

「?!……………沢田綱吉」

「どうしたんだよ！？こんな夜遅くまで」

「あなたこそ、こんな時間まで1人アジトで何してるんです？」

「いや……みんな出掛けちゃってさ……骸なんか知ってる？なんか重要なこと隠してるっばくて」

『ボンゴレの超直感ですか……』

「僕は知りませんよ……」

「そうか……困ったな……あのお兄さんや山本の忙しそうなお様子見るとただことにみえなくてさ。」

『あの2人は……素直過ぎも困りものですね』

「仮にもし、何かあったとしても、みなあなたに不安をかけまいとしているのでは？」

「そうかな……みんなで解決しちゃったら、俺いる意味なくなるよ」

「……理解できませんね。組織の上に立つものは下の者に任せてい

ればいい…。あなたは獄寺隼人たちの結果を聞けばよいただけだとい  
うのに…」

「いつも言ってるだろ。俺はボスとか上の人間とかになつたつもり  
ないんだってばっ…！いつだってみんなと同じ位置で見て、感じて、  
動きたいんだ…じゃないと、みんなと壁作ってるみたいじゃないか」

「……………」

「ねえ」

「「?!」」

「もういいかな。話があるんだけど」

「ひ、雲雀さん！」

「話とはどっちですか？」

「キミにだよ。六道骸」

「あ、じ・じゃあ俺は自分の部屋行ってますから」

「で。話とは何ですか？珍しい」

「キミも会ったんじゃないかと思ってね」

「？」

「シックファミリー」

「?!」

「やはりね」

「クフフ…あなたからその言葉が出てくるとは。」

「並盛見回つてるときバツタリね」

「…友人とバツタリ感覚ですか」

「シックファミリーに入らないかとね」

「10年後のあなたは確か少し霧の属性も入っていましたね」

「みたいだけど、今は試したこともないし分からないな」

「あなたはボンゴレ最強の守護者と名で知られています………おそらくたとえ微量であっても、霧の属性を持つ強い者は取り入れるつもりなのでしょう……」

「冗談じゃないよ…噛み殺してやるうかと思った、逃げられたけど…」

『……………彼らは雲雀恭弥という人間を分かっていますね』

「弱い奴ほど群を成す…彼らも大したことないな…拍子抜けだよ。」

「雲雀恭弥。話はそれだけではないでしょう?」

「ああ。彼らの言ってた巨大な霧の力とやらだけど」

「心当たりが?」

「“大空”が開ける霧のボックス兵器があるらしい」

## 大空と霧

「クフフ…霧のボックスを大空があげるとは……面白い。」

「そのボックスを開発したのは、3人の研究者のうち誰か分からない…謎に包まれてるボックスらしい。中身も不明」

「ただ一つ、そのボックスは霧なのにも関わらず大空の属性が必要不可欠だと…」

「らしいね。2段階で開くボックスらしい…第1段階は霧、第2段階で大空」

「巨大な霧の力というのは、大空の属性で開けた場合のものだということですかね」

「たぶんね」

「しかし、よくまあ……そんなことよく調べましたね」

「ボックスのことは少し前からだから。そんな噂を耳にしただけさ」

「けど…噂だけでないと」

「現に彼らの存在がね」

「同感です」

「どじするの」

「……………」

「……………なに」

「あなたからこの僕にそう聞いてくるとは…クフフ…何考えているのか」

「それはこっちのセリフだから。

僕は霧のボックスには興味ないんだ。リングはあるけどね。キミは霧の属性だしね…あの集団と群れるかなって思ったただだよ」



「クフフ…なるほど。…僕はあの集団には興味ありません。が、霧の属性として、そのボックスには興味ありますね」

「沢田綱吉の力がある」

「彼のことだ。あの霧属性集団には力を貸さなくとも、僕には貸すでしょうね…」

「……………」

「しかし、彼らがもう沢田綱吉を狙っているという事は」

「ボックスはすでに彼らが持っている」

「…クフフ…面白くありませんね。」

「……………」  
「好きにしなよ」

## 前兆

『……………っ、どじする』

嵐の守護者、獄寺隼人は頭を悩ませていた…雲の守護者、雲雀恭弥・霧の守護者、六道骸から聞いた霧の属性集団への勧誘の話…謎のボックスの存在、霧の属性集団がそのボックスの巨大な力を手に入れるために自分のボス、沢田綱吉を狙っていたこと。彼らの狙いと全ての辻褄は合ったが、これからどう対処して行くか……………

「相手は霧属性のスペシャリストです。侮れませんね」

六道骸もいつになく険しい表情をしている。

「とりあえず…雲雀。ボックスについて調べるつもりなんだろ？」

「……………まあね」

「ボックスの件は任せた。……………どう処理するかもな」

「わかった」

と、雲雀恭弥は部屋を出ていった

「あと、骸」

「何でしょう」

「一応、雲雀の動きを見つつ……………奴らの対処法を練ってくれ」

「なぜ、雲雀恭弥を見なくてはならないのです」

「まあ雲雀のことだから心配ねーだろうが……………念には念を……………ってことだ。なんせボックスが謎なんだ。何が起きてもおかしくねーからな」

「……………分かりましたよ」

「慎重に頼むぜ」

「……………獄寺隼人……………」

「なんだよ？」

「……………もし戦闘になったら？」

「?!?!」

「……………。」

「……………」

「潰せ」

「クフフフ…承知しました。面白くなってきましたね…」

「バカか…笑い事じゃねーよ…」

と、突然会議室のドアが凄まじい音で開いた…

「獄寺!!」

「?!…なんだよ山本、おどかさな」

「ツナが倒れた!!」

「なっ!!」

「?!……………沢田綱吉」

## 崩れゆく大空

「ボス………しっかりして……」

「凧……来ていたのですか」

「?! 骸様!」

クローム髑髏こと、凧は骸の袖を掴み泣き出しそうな声で震えていた……

「ボス………苦しそうな……でも、私! 何もっ」

「しっかりしなさい、凧。沢田綱吉が苦しんでいるのなら、あなたが不安な顔をしてはいけません」

「……でもっ」

「大…丈夫だよ。クローム…」

「?!ボス!」

「十代目っ!」

「ツナ!しっかりしろ」

「みんな……大袈裟だよ…大丈夫大丈夫」

「全然説得力に欠けてますよ。沢田綱吉」

「あははは…骸まで来てたの…」

「待ってる沢田!!!いま我流の晴の炎で極限良くしてやるからなっ  
!」

「ありがとうっ…!」



ガオ…

「ナッツ…心配ないよ…ありがとうな」

心配そうにツナのそばから離れないツナのボツクス兵器、大空ライオンのナッツに、ツナは優しく声をかけ、オレンジ色に輝くたてがみを撫でる。ナッツも、ツナの温かい手のぬくもりにホッとしたのか顔がほころび始めた。

「ツナ！なんかほしいもんとかあるか？！」

「ありがとう…山本、大丈夫。」

「?!……………おかしいぞ」

「どうした？」

「活性の晴の炎なのにも関わらず、沢田の容態が変わらんぞ…！」

「何?!」

「笹川了平、少しいいですか」

骸は了平を退け、手をツナの額にのせた

『?!』

「これはただの風邪ではありませんね……」

「どづいつことだ?! 骸」

「かすかにですが…炎の力を感じます」

「何?! 俺は何も感じなかったぞ!!」

「おそらく、霧の力です。優れた術士でも感じ取るのが困難なほど薄くかけてありますが。」

「俺の雨の力の鎮静でなんとかならねーかな？骸」

山本はリングに青い炎を灯しながら言った

「無駄でしょうね。薄いとはいえ、質はとても高い霧の力だ。深い幻覚の世界へ引きずり込もうというのか………ともかく、調和の力を持つ大空の沢田綱吉をここまでですから、強力な力です」

「十代目にこんなこと出来る奴らっ！！」

「霧の属性集団に間違いないですね」

消えゆく雲

「……………」。

「よお！恭弥」

「……………遅いよ跳ね馬」

「おいおい…これでもかなり急いできたんだぜ！！デカくなったなあ！恭弥、大学だもんなくそりゃあデカくもなるな」

「君とそんな世間話しによんだ訳じゃないよ。早く情報くれない？」

「相変わらず可愛いくねー弟子だ…謎の霧のボックスの情報提供したのは俺だぞー！」

「頼んでない。君が勝手に話し始めたんでしょ…」

「……………まあいい。キャバローネの方でもかなり警戒されている、俺も気になる一件だから…」

「自分の心配したら？君大空でしょ。」

「いや…奴らの狙いはツナだ。これははっきり言える！」

「……………」

「恭弥…ツナが倒れたらしい…」

「?!」

「獄寺から連絡があったんだ。もしお前に会ったときには一応耳に入れといてくれとのことだった。」

「彼らが関係しているということか……………」

「?!?!おい!どこ行くんた?恭弥」

「用は済んだからね…帰るんだよ」

「つつたく」

「?!?!」

本部には返さない。10代ボンゴレ最強の守護者、雲雀恭弥。

「…ワオ」

お前は厄介だ。大空とともに消えてもらおう。

「恭弥っ!!」

「手を出さないで…跳ね馬。…僕より先に沢田綱吉にちょっかい出したのは君かい？」

……。

「答えがないってことは肯定でとらえるよ。」

…風紀を乱した君は、ここで噛み殺す」

「クピイイ!!」

「いくよ…ロール、  
形態変化」  
カンピオフォルマ

「?!?!」

愚かな…我々を相手に牙を剥くとは…

「…キユウウ」



「ロール！」

「……………」

「ロール！…聞こえないのか？！」

「?!」

ガキンツ！！

ほう…流石は最強の守護者、ボックス兵器が使えないと分かると見  
や、捨てるか…

「……………っ！」

だが、トンファーのみの貴様など恐れるに足りん

「言っね…噛みごたえがありそうでフクフクするよ…」

だが、我々に長居は無用

「?!?!.....っ?!?!」

「恭弥っ?!?!」

「.....」

「恭弥っ?!?!返事しろ?!?!なぜ攻撃しない?!?!恭弥っ?!?!」

無駄だよ。跳ね馬デーノ…いま、雲の守護者の精神はここにはない…

「何?! 恭弥!」

バタッ

「!?!?.....まさかつ!!恭弥が...恭弥!!」

まずは、1人.....  
もうすぐだ.....もうすぐ.....

「恭弥！！！！！」

?!!

「?!十代目!!どうしました?!」

「沢田!」

「ツナ!」

「はっ、は……ひ……ばり……さん、は……?」



「雲雀ならいま出てますが…」

「早…く…ひ、ばり…さんがっ…！」

「ツナ！雲雀がなんだ？！」

「ひ…ばり…さ、んを誰か…！む、かえに……行って…！」

「なっ！雲雀を？！」

「は…やく…ひ、ばり…ち…ん」

「沢田！安心しろ！極限俺がいく！」

「お兄…さん」

「何も心配するな沢田！大丈夫だ！俺が雲雀をむかえに行くからな！」

「は…い…」

「獄寺、山本、行ってくる！沢田を頼んだ」

「先輩！俺の次郎と小次郎連れて行ってくれ！次郎の鼻が利くし、小次郎で空から探せる！！」

「わかった！」

「ひ……ばり……さん」



見えたモノ

「十代目……しっかりして下さう……」

「……………」

「ツナ！……………ギリギリだぜ……」

「ちくしょっ」

「少し落ち着いたらどうです。獄寺隼人」

「っ……！分かってる……！」

『分かってないですよ』

骸がそう思ったのと同時に部屋のドアが開いた。

「誰か！！極限に手を貸してくれ！！！」

「？！先輩！！………雲雀？！」

「どうした！雲雀！」

笹川了平の肩にはグッタリとし、全く動かない雲の守護者、雲雀恭弥の変わり果てた姿があった…

「雲雀の部屋に運びたい！！山本、獄寺、骸！手を貸せ！」

「……ウソだろ」

とりあえず雲雀を床に伏せたはいいが、他の守護者達の動揺は隠しきれない。…あの10代ボンゴレ最強の守護者、雲雀恭弥がピクリとも動かない。かつて雲雀がここまで絶対的な敗北をしたことはない…“ただ事ではない”…守護者誰もが感じていた。

「ダメだ…やはり俺の晴の炎ではどうにもならん！」

「十代目と同じか」

「ツナはまだ意識がある、けど雲雀はそれすらないぜ！」

「恭弥の精神は持っていかれちゃってるらしい……」

「?!ディーノ!ディーノじゃねーか!」

「跳ね馬、てめえなんでここに…」

「俺も恭弥ともに奴らと対峙してたからさ」

「そういうことか…雲雀は謎の霧のボックスの情報をてめえからもらってたのか」

「ああ。まあ偶然が重なったようなもんだけどな…」

「??？」

「俺は霧のボックスのことは他のファミリーから聞いたことだ…俺も大空の属性だが、ツナの方が一番危ないと思って、ボックスについて独自に調べてる恭弥に教えたんだ」

「と同時に、雲雀恭弥は獄寺隼人から霧のボックスについて探るよう指示を受けたと」

「そつだ。六道骸」



「……………骸、どう見る」

「跳ね馬ディーノ、さっき“精神は持っていかれた”と言ってましたね」

「ああ…確かにあいつらはそうだった。…こいつを見てくれ…」

「?!こいつは!」

「極限に雲雀のボックス兵器、雲ハリネズミではないか!!」

「ロールまでやられちゃまったっていつのか。」

「症状が雲雀恭弥と同じですね…」

「ロールがこうなっちゃったとき、恭弥の声は全く届いていなかった。」

「極限にどうということだ?骸」

「おそらく強い幻覚を見せられているのでしょう。沢田綱吉は大空の力、調和で何とか自ら現実世界とつながりとめているようですが…雲属性の雲雀恭弥には出来ない」

「それで雲雀の精神は持ってかれちゃったってことか」

「骸、なんとかならねーか？」

「目には目を、幻覚には幻覚です」

「雲雀っ!!」

「……………」

「無事みてーだな、雲雀」

「……………っ!!」

「恭弥!まだ起きるな!」

「……………何勝手に、僕の部屋で群れてるの？」

「あははっ！開口一番それかよ！」

「やはりコイツに心配は余計だったな…元気ではないか！雲雀」

「……………」

「雲雀恭弥」

「……………キミに借りを作るなんて…最悪だよ…六道骸」

「あなたがここまでの幻覚にかかるのも珍しい…何があったのです？」

「……………」

「ぶっ倒れていた間、何を見ていたんだ？雲雀」

「……………夢を……………」



見せられたモノ

「夢…だと?!」

「極限にどんな夢だ？」

「……………」

「?雲雀？」

「最初は……以前全員で見たのと同じ夢だった……」

「「?!!」」

「だがその後は……」

「?なんだよ？」

「勿体ぶるな!極限に気になるぞ!!雲雀!」

「……………沢田綱吉に……………」

“殺される”夢を見た

「なっ?!!」

「ツ・ツナに……………」

「殺されるだど?!!」

「なんかの間違いじゃねーか?! 恭弥」

「最初は…確かに疑いたくなるほどだったよ……沢田綱吉から事態に“殺気”なんて感じたことないからね」

「十代目が…殺気?!」

「ツナに限って有り得ねーよ! しかも仲間相手に……」

「うむ! 雲雀ならともかくな……」

「噛み殺すよ…笹川了平……」

「いくら頭で否定しようとも、強い幻覚により嘘が真の如く感じさせられたというわけですか……」

「……………」



「なるほど…厄介ですね。僕ほどの術士なら奴らの幻覚などなんてことありませんが…霧の属性でないあなた方ですと、こつもこつまです追いつめられるとは…」

「……………っ…！」

「おい！まだ動くな雲雀！」

「奴らを噛み殺さなきゃ、目覚めが悪い」

「でたよ…雲雀の悪い癖。」

「雲雀恭弥、今出ても待ってる結果は同じです」

「……………」

「相手はボックス兵器にまで幻覚の手を加えられる。雲ハリネズミまでやられているのです。トンファアのみでは、いくら雲の炎があるとはいえ無謀というもの…」

「とりあえず寝てる！雲雀。今十代目まで倒れてしまわれてんだ、守護者の俺たちが動いたところで奴らの思うツボだ」

「それは君たちの都合だろ。僕には関係ない」

「雲雀！貴様！」

「まあまあ先輩、雲雀も。身体に障るぜ」

「ではこうしましょう。雲雀恭弥、あなたのボックス兵器の状態は僕がなんとかします。その間、自身の身体を休めるなりして待っていてください。この見代わりは後々で結構」

「……………わかった」

「俺たちは十代目の看病と護衛だ！奴らは所構わずいきなり来やがる。油断すんなよ！」

「おっ！」「おっ！」

## 異変

「十代目、雲雀は大丈夫です。安心して休まれて下さい」

「…そ…う。あり、がとう…獄寺くん…」

「これしきのこと」

「すまんな…沢田、骸いわく、お前にかけられた幻覚は強すぎて極限簡単にどうにかなるものでもないらしい」

「骸が、ロールの状態直したら形態変化カンビオフォルマして見てやるから待っててくれってさ」

「う…ん。俺は、大丈夫…。」

「十代目……」

ガウ…

「ナッツ…心配ないよ…ありがとう…」

「十代目、俺、今日一晩中お傍に付いていますので、何でもおっしゃって下さい！」

「うん。……ありがとう……じゃ……お言葉に、甘えようかな……」

「はい。」

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

「……寺くん…獄、寺…くん」

「…ん…あ、すいません。寝てました、はい…十代目何でしよっ？」

に、逃げて……

十代目……？

?  
!  
!

時間

「……っ！じ・十代目……なにを……」

「……」

「十代目ええ！！」

「……」

『クソ！血い出し過ぎた！クラクラしやがる』



「クッ！瓜！！」

ニョーン！

「十代目がおかしい！山本を呼べ！早くっ！！」

「ヨッソ…」

「俺に構うなっ！…！急げ…！」

「せせ」

「?!?!」

来るべき時が来た…分かるか？時間だよ……ボンゴレ十代目など、  
もはやただの我々の道具だ……

「ボンゴレなめるな……」

?!!!

ドカンッ!!

?!! 仕込み爆弾か…この男…自分も死ぬつもりか…

「うーりよ、し行ったか……」

愚かな……ボンゴレ十代目……堅い忠誠心を持つ嵐の守護者を貴様の  
手で葬ってやれ

「……………」

沢田綱吉は従うかの如く…オレンジの炎の灯ったグローブを獄寺隼人に向けた…構えは、？バーナー…

「じ、じゆう…だいめっ…」

「……………オペレーション？」

「クッ！動けねえ……そうか……雲雀の言っていたことが……分か  
つたぜ……」

時雨蒼燕流特式十五の型“雨宿”

「……………」

水の膜が沢田綱吉を覆った…水を操るのは…

「大丈夫か！！獄寺！」

「ち…まもっし…」



「極限いま治療してやるからな！我流！」

「おれよりも……じゅうだい……めが、おかしい！」

「……みてーだな……ツナのやつ、獄寺をマジでヤル気だったみたいだぜ……」

バンッ！！

『雨宿をこつても簡単に壊されるとはな……雨の特徴、鎮静で作った俺の完全防御技を……流石はツナだぜ……』

「オペレーション？」

「「「?!」」」

「どうするのだ山本!!俺達では到底、今の沢田には極限太刀打ち  
できんぞ!」

「.....」

クピイイイ!!

「ロール、球針態」

「雲雀！」

『あれは…十年後の雲雀が、ツナの修行のときにやった雲の炎高密度の完全密封空間！！』

「何してるの？山本武、笹川了平、早く獄寺隼人を連れて逃げなよ」

「お…ねに…じゅう…だいめを、置いてけっつつかのやつ」

「クフフフ、今のあなたでは足手まといです」

「骸！」

「さあ…早く逃げなさい。沢田綱吉は、我々が食い止めます」

「つむ…行くぞ獄寺！」

『クソ！十代目……！』

「先輩！並盛のボンゴレアジトは危険だ！ここは一旦、イタリアの本部にしよう！」

「分かった！」



「小次郎！」

ピイイイ！

「お前は残って、雲雀と骸にイタリア本部にいることを伝達するんだ！2人と一緒に帰って来い」

ドカン！

.....

プイイ

「球針態が、壊れた……  
……  
ロール、  
形態変化」  
カンビオフォルマ

「ムクロウ、  
形態変化」  
カンビオフォルマ

「沢田綱吉は完全に奴らに操られていますね……」

「そんなこと今までなかった……」

「相手は霧の術士、しかもスペシャリストです。  
……いくら沢田綱吉  
と云えど……」

「?バーナー」

「「?!」」

「~~~~~」

「クッ!!!……これが……あなたの夢に見た殺気……ってやつですか!」

「いや……近いけど……まだ、何処か違う。」

「ん〜…確かに、癪ではありますが、？バーナーの出力が完全に  
出ききっていない。完全な？バーナーで来られたら、こちら側は防  
御する術がない。………マズいですね」

「……………」

「「?!」」

霧の属性集団に操られている沢田綱吉は、雲雀達に背を向け…彼らの元へ歩き始めた

「どこへ行く気だい？沢田綱吉」

「…ボックスの…覚醒のためだ。お前の相手をしている暇ではない…」

その通りだ。沢田綱吉、さあ！共に、行くぞ。あのボックスを開く  
するには貴様の炎が必要なのだ

「……………」

「クフフフ、言ってくれますね。…あなた方に用はなくなるとも、こ  
ちらが用があるので…遊んでいってもらいますよ！」「

行くぞ。 沢田綱吉

「.....」

「待ちなよ」



「行かしませんよ！」

「……………雲雀、骸」

「「なっ！」」

## 救出

10代ボンゴレファミリーイタリア本部

「獄寺さん!!ここ・これは……」

「山本さん!どうなさったのです!ボスは?!」

いきなり重体の獄寺隼人を抱えて帰ってきた山本武と笹川了平に、  
イタリア本部の部下達からの質問が絶えない………

「極限説明は後だ!医療器具の準備を急げ!!」

「は、はい……」

ガチャ

?!!

「なっ!」

「雲雀!骸!」

「はあ…はあ…我々も…一度、部屋に入ります…」

「……………」

「雲雀殿！怪我なさっているのですか？！」

「構わないで。大したことじゃない……」

「骸殿！」

「クフフ…心配無用…少し炎を使いすぎただけです。少し休ませて貰いますよ……」

「骸！雲雀！」

「……なんだい？笹川了平」

「獄寺から言伝だ、後で自分の部屋に来てほしいとのことだ」

「……ああ。」 「分かりました」

……獄寺の部屋

……

寝ている獄寺の隣では彼のボックス兵器、嵐猫の瓜が心配そうに体を擦り寄せている

コンコン

141

「獄寺、入るぜ。」

先に入って来たのは雨の守護者、山本武だ

「…ああ…」

「大丈夫か？獄寺」

「だいぶな…」

「…ツナの…ことだが…」

「?!じ、十代目は?!」

「起きるな！獄寺、傷口が開いてしまっぞ」

「俺なんてどうだっていいんだよ！十代目は…」

「騒ぐな獄寺。はやる気持ちも分かるが、極限、今は雲雀と骸の話  
を聞いてからだ」

「……………」

「しかし、ツナに仲間を攻撃させるなんて…ひでー話だ」

普段温厚な山本でさえ、今回のシックファミリーのやり方は許せな  
いらしい…

「うむ…沢田の性格を考えるとかなり酷だ」

「奴らの狙いは…これだ…」

「獄寺…」

「十代目の精神を壊し、倒しやすくしてやがる」

「沢田の天空の特徴、調和を持ってしてもダメとなるとな…」



「打つ手ねーぜ……」

「もう入っていいかい？ 獄寺隼人」

「雲雀……骸……」

「クフフ……呼び出したのはあなたですが。」

「ああ………雲雀」

「……………。」

「俺も……薄れていく意識の中で……十代目の“殺意”をはじめてみた……」

「あなたもですか、獄寺隼人」

「極限どついうことだ?!骸」

「我々も沢田綱吉と対立し、最後の最後に彼の“殺意”を真に受けました」

「僕の雲の防御、六道骸の霧の防御を使っても危うかった」

「ツナのXバーナーか」

「どつするのだ?獄寺……」

「つたりめーだ……十代目を助けに行く……」

「だなっ!」

「うむ。極限!俺達のボス奪還だ!」

「雲雀…骸…」

「「？」」

「てめえらは…どうすんだ？」

「クフフ…みすみす、彼らなどに霧のボックスを渡すわけにはいきませんから」

「彼らを噛み殺ろさないと夜も眠れないからね」

「あははは！雲雀の夜って大変だな！」

「あと沢田綱吉も噛み殺す」

「それはダメだろ！！」

「よし！獄寺！極限ボンゴレ総出で奴らを討つぞ！」

「…まだあと1人たりねえ」

「?!ランボか!」

「けどよ、獄寺…ランボも少しでかくなっただとはいえまだ小さいぞ? 付いてくるか?」

「大丈夫だ…あのアホ牛は…秘めた電撃を持つ雷の守護者だからな」

ランボ！

「ランボ〜」

「ランボ！」

「なに〜???山本〜了平〜」

日本の沢田綱吉の家へ電話をかけた山本と笹川：電話に出たのは、かつて5才児で小さかった雷の守護者、ランボである。今では、ボンゴレ雷の守護者ということはまだイマイチよく分かっていないようだ。だんだん周りは見えてきたようだ。だが、いまのランボくらい小さかったフウ太はもつと大人びていた……。そう考えるとランボ少し幼いのかもれない。

「ランボ！アシはこっちで手配する！今すぐイタリアにあるボンゴレ本部にくるんだ」

「え〜。ヤダぶー！なんでランボさんが〜」

慌てる山本に対して案の定、ランボの返答はゆるいものだ…

「ランボ！これは真剣な話なんだ！ちゃんと聞いてくれ」

「山本、変われ」

了平はそういつと山本から受話器を受け取り話した。

「ランボ！極限俺だ！」

「了〜平〜！」

「ランボ！極限！俺の話を聞いてくれるか?!」

「うん」

「沢田にもう会えんかもしれない……」

「…え？」

「ランボ……沢田はいま大変なことになっている。このままでは、  
生……沢田に会えんかもしれないのだ。」

「ツナ？」

「……そうだ。沢田だ」

「ツナ？」

「……………」

「……………だ……………イヤだ……………ツナ……………イヤだあああ！！！！」

「「？！」」

「ツナあああああ！！！」

「ランボ！！！」

「？！！！」

「ボンゴレ本部に來い！極限！俺達と共に沢田を救いに行くぞ！沢田に、会いに行こう！！！」

「いく！！ランボさん……………ツナに会いに行く！」

ツーツーツー……



「切れてしまったぞ」

「さすが先輩っすね！」

「なんだかんだ、ランボの面倒見る機会が多かったからな！」

「よし！獄寺に報告しに行こう。」

「これで…本当に揃うのだな……」

10代ボンゴレファミリーが



シクファミリーVSボンゴレファミリー

「来やがったな…アホ牛」

「ギャハハハ！獄寺ボロボロだもんね！」

ピキ

「まあ…抑えろよ…獄寺…」

「極限、事実だしな」

「うるせー！」

「???…雲雀と骸はどうした？」

「そついえば姿が見えんな」

「骸が奴らのアジトを見つけてくれた。アイツらは先に行かせた」

「おいおい…」

「極限に大丈夫なのか?! 向こうには沢田がいるのだぞ?」

「十代目は後だ。まずはシックファミリーだけを潰して来いだけでは言っている。」

「なーる!」

「うむ! それならあの2人で事足りるだろうな」

「俺達も行くぞ」

「ここですね。強い力を感じます」

「全く…並盛の森林の中にこんな空間創るなんてね…」

「おそろく…強い幻覚で創られていますね。森林につまぐ隠しているつもりでしょうが…クフフ…この僕の目から欺こうなど1000年早い…」

「何でもいいよ…並盛の風紀の汚す奴は、噛み殺す！」

「舞え…ムクロウ、カンビオフォルマ形態変化」

「カンビオフォルマロール、形態変化」

「いまから僕がこの空間に亀裂を入れます。そこを打ち込んで下さい。」

雲雀はうなずく。

「ハッ！」

骸は杖をまわし、狙う空間の点をめがけ切っ先を衝く。

すると、ガラスに亀裂が入るかのごとく、衝いたところから空間が歪んでいく。

「ロール、球針態」

クピイイイイ！



ドカンッー！

雲雀と雲ハリネズミのロールの攻撃により、完全に空間のシールドは壊された。先は真っ暗闇である。

「……………暗い。」

「明かりは持っていませんよ。」

「別に、アテにしてないから」

「クフフフ…言ってくれますね」

「大体、なんでキミと行動しなきゃいけないの？奴らは僕の獲物だ。僕一人で噛み殺す」

「クフフ…手を出すつもりはありませんよ…僕はただ、霧のボックスが手に入ればいい。」

「物好きだよね。キミも」

「「?!」」

「……感じますか、雲雀恭弥」

「……幻覚」

愚かな……

「「?!」」

この空間に入った時点で幻覚にかけられているとは考えないとは、  
ボンゴレファミリーもそんなものか…

「「?!」」

「霧のバリアー……」

「割れていく……」

「空間が……」

「ルール、防御だ」

「「っ！間に合わない！」

「「っ！おっ！」

「「っ！」

私は霧の属性、シックファミリーの中でも最強の術士……“ルカ”  
と申します。……とはいっても、すでに聞こえていませんか…

「へえ…君、強いんだ」

なに?!

「僕を退屈させないでよね」

なっ？！私の幻覚空間が！

「私の”？”私達”の間違いでしょ」

いつから気付いていたのですか…



「癩だけど…ボンゴレV Gを持つ、最強最悪の霧の術士がいるからね。うち（ボンゴレ）には……」

六道骸かつ！

「本当に癩だけど」

しかし、分かりませんね。私達は霧の術士…術士の六道骸が相手になるならまだ分かりますが、わざわざ二手に分かれ、1対1を申し込むとは…あなたは幻覚にかかつてはおしまいですよ……

「わかってないのはキミの方だ。」

?!!

「僕のプライドを傷付けたことの重大さをわかってないね」

……この男！なんて炎を…

~~~~~

「ちねちね、早速ですか。喧嘩っ早い人ですね…」

.....

「おや？どうしました？こつもあっさり幻覚空間が破られたことがそんなにシヨックでしたか。」

雲雀恭弥に勝機はない。あの男、死ぬつもりか…

「クフフフ…こちら随分と口調が違いますね」

俺はルカの双子の兄、アンジユだ

「クフフ、天使の名前とは…趣味が悪いですね」

雲雀恭弥は術士でない。術士の我々に勝ち目はないぞ

「クフフフ…術士か術士でないかは雲雀恭弥の問題には成り得ませ  
ん。」

なに?!

「なにせ、ボンゴレファミリー最強の守護者とうたわれている男だ」

?!!

「癪ですがね……………まあ……………こちらも始めましょうか……………」

雲雀恭弥VS霧の術士ルカ

「……つまらないな……」

「はあ……はあ……」

「口で言ってるほど対したことないね……雲雀恭弥も」

「くっ……」



「本当にボンゴレ最強の守護者なの？術士相手でこの有様なのにさ  
…」

「……………」

「ボンゴレV.Gを使ってもその程度とはね」

「キリキリ…」

「なっ  
」!

「じゃっ  
り  
い  
っ  
た  
わ  
い  
だ  
よ  
」

「?  
」

「嫌いなんだよ。しゃべりながら戦う奴、萎える」

「負け惜しみにしか聞こえない…っよ!」

ガキン!

雲雀のトンファーが鈍い音を立てる

「…っ！」

「ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥。フラフラのクセに！口の減らない奴だよ」

「その呼ばれ方は好きじゃないな……ロール、準備はいいかい？」

「?!」

「キミは、ひつじ雲って見たことあるかい？」

「なっ?!なんだこれは!!」

雲ハリネズミのロールは二匹一匹分裂し、辺り一面に波紋状に広がっている。まるでひつじの羽毛のような形だ…

「これは現在における、雲ハリネズミロールの最大増殖数だよ……その数、1,000」

「?!?!」

「こつこついう風に、雲が波紋状に広がってひつじの羽毛のようにみえる形をひつじ雲という。

……キミにはよけられるかい？ 1、000個のロールの針を。いや

……針は背中に無数にあるから1、000以上か……」

「雲雀恭弥、貴様っ！」

「ただこれは最大の攻撃技でもあるから、ロールの増殖の準備にかなり時間がかかってね……しかもその間、かなりの炎の消費するから、僕自身は無防備になる」

「くっ」

「けど……」

「せっせめっ」

「この攻撃から逃げるのはほぼ不可能だよ」

「せめろおおお」

ドオン！……！



キュウウウウ

「……  
……疲れた。  
眠い」

「  
ロール……少し休もう」

到着

「?!?!」

「クフフフ…：どうかしましたか？」

「ルカ……」

「ああ…あなたの可愛い弟は、あのバトルルマニアによって嘔み殺されてしまったようですね…：クフフ、お気の毒に」

「貴様らっ！ボンゴレ！」

「愚かなマフィアと一緒にされたくはありませんね。」

「フン……貴様はボンゴレ組織の継承をしている……貴様はボンゴレの人間だ」

「我々は利害一致の下、動いている。それは沢田綱吉とて同じこと」

「？解せんな……10代ボンゴレファミリーは」

「クフフフ…我々の関係を余所者にそう簡単に理解されなくありません…さあ、おしゃべりは此処までとしまししょうか…」

「……………」

「クフフフ…すぐに黄泉へとお連れしますよ…僕も忙しいんでね」

……………

「獄寺！ここにだぜ！」

「うむ、極限！骸と雲雀の炎のあとを感じるぞ」

「よし、中に入ったらなるべく離れるな。離れたらかなり不利だ」

「OK！」

「了解した」

「アホ牛、てめえは芝生頭と一緒にいろよ」

「わかってるもんね〜！」

××××××××××××××××  
「暗いな…」

「懐中電灯もってるぞ」

「何で持ってたんだよ!」

「さすが先輩!用意周到っすね」

「つけてもあたりが照らされんぞ?!」

「ってことは、ただの暗闇ってないってことだな」

「ああ…たぶん、霧の幻覚で作られた空間なんだろう。俺達はすでに、奴らの手の中だ…」

「OK!なら…」

次郎！小次郎！カンピオフォルマ形態変化

「次郎、行くぞ……」

時雨蒼燕流、特式十二の型 “霧雨”

「おお！そうか！山本の対幻覚対策の技を持ってすれば……」

「そういこととす」

「一番、幻覚が弱いところを探し出せるか？」



「……ランボの斜め後ろあたりだ。」

「じゃあ、ランボさんやる！」

「なっ！」

「出来るのか?!ランボ！」

「へへん!ランボさんの新技見せてやるもんね」

「おっしーびーん…」

「「「すげー久しぶりに見たな……牛井」「」

カンビオフォルマ  
形態変化ー！！

「ランボ、そのV.Gのヘルメット……どっにするんだ？」

「投げるんだもんねー！！」

「「「投げる？ー！！」「」

「ちょ、ちょっと待てアホウ」

「一撃必殺、  
“電砲”  
} } }  
! !  
」

バチイイイ!!

「ギャハハハハハ！見たかあ〜〜！ランボさんの新技！」

「ま・まさか…ヘルメット投げるとはな…ランボ…」

「極限にすごいぞ！ランボ！暗闇をかつき消したではないか！」

「当然だもんね！」

「ランボ……マジで獄寺死んじゃうよ……」

「???.?」

「~~~~~っ！……このっ！アホ牛っ！……果てる……」

「びびり！」

六道骸VS霧の術士、アンジユ

「?!……………おやおや、もたもたしていると邪魔が入りそうです  
ね……こちらも早くケリをつけましょう。」

「……つくと思ってるのか?」

「クフフフ……あなたは誰を相手にしているかわかっていない。」

「そっくり返すぜそのセリフ……」

「行きますよ!」

「?!」

骸の造り出す異空間……霧のVGもあるだけあり、強力なものなのは  
明白だった

『ボスが欲しがる人材なわけだぜ…六道骸…』

「クフフフ…どうしました？早く対処しなければなぶり殺しですよ？」

「なめるなよ」

「?!?!これは……」

~~~~~

「歩けど歩けどなんもね〜な〜」

「うむ……」

「…静だ」

「ぐびゅー！」

ランボが転んだ。

「大丈夫か?!ランボ!」

「が〜ま〜ん!」



「何やってんだよ…アホ牛」

「ランボさん悪くないもんね！なんか踏んだんだもんね！」

「何キミ…噛み殺されたいの？」

「雲雀！！」

「極限何しているのだ?!こんなところで！」

「炎使いすぎて疲れたから寝てただけだよ」

「あははは！だからってこんなところで寝るか?!」

「じゃあ…雲雀…お前シックファミリーをやったのか？」

「無駄だね……」

「?!」

「極限どついついことだ？」

「表に出てきたのは2人だけ。しかも小食動物並で萎えた」

「けど…骸の炎の感じがする。お前ら二手に分かれたのか？」

「僕と彼では目的が違うからね」

「……………」。

「極限どうする？獄寺」

「骸を待つか？」

「いや……雲雀の言うとおりだ。俺達と骸の目的は違う。なら骸を待つのは無意味だ。先を急ごう」

「だな！」

「うむ！沢田が待っている！」

「……………」

「……………本当にあなたは趣味が悪い」

「そうか？お前のボスに合わせてやったただけだ」

『……………。幻覚でない。とすると、目の前にいるのは……本物の……沢田綱吉か……不味いですね……』

「僕は沢田綱吉に用は無い」

「骸……」

『?!?!』

「構えろ」

「クフフ。沢田綱吉…無意味な闘いをするのですか？」

「……」

「この僕が闘わないと言っている。…にも関わらず、闘うのですか？無意味です」

「関係ない」

「?!」

「構える。骸…構えないのなら、俺からいく」

「……ヤルのですか？同じボンゴレの僕を。」

「……………」

『??動きが止まった』

「……くる……む……くる」

『?!!?!!?!!』

「じゅっ……じゅん……むくろ」

『沢田綱吉が、正気に戻ったか』

わずかとはいえ……調和の炎で正気に戻すとは。さすがはボンゴレ？  
世と違ったところか……

「……骸……おれ……」

「?!」





ボンゴレ 解散

「くくくでくくく！ランボさんもう歩けない」

「はあ?!…てめえな…」

「ランボ！極限！背負ってやる。来い！」

「やったもんね！了く平く」

「さすが先輩！」

「わりいな…芝生…」

「極限気にするな…ランボが退屈するのも無理ない。かれこれ1時間以上は歩きっぱなしだ…」

「おっかしいな、確かに幻覚は解いたはずだぜ？」

「向こう側が様子を窺ってんだろ。雲雀が奴らの一味をヤツたとしてたら尚更だ。」

「うむ…監視している側と、されている側では精神的にかなりに違う」

「俺達の精神すり減らしてから、最後キてる所で叩くってか？」

「……………」。

「?!おい!あれ!」

「「骸!」」

「「極限に大丈夫か?!骸!」」

「大丈夫です。やられていませんから」

「何があつた？骸」

「……………」の闘い…無意味です」

「「なに?!」」

「なに言つてんの?キミ」

「沢田綱吉に会いました」

「「?!」」

「彼はかなり彼らに精神を食い尽くされています。僕と会った時は調和の炎で辛うじて正気を保っていましたが、完全に彼らの手の中に落ちるのも時間の問題…」

「だったら尚更、十代目を救うのが俺らの使命だ」

「沢田綱吉は一言」

“ボンゴレには…戻れない”と。

「ツナ……」

「沢田の事だ。仲間である俺達を傷付けたことで相当参っているの  
だろうな……」

「ですね。自分から“手を引いてくれ”、と……」

「それでキミは手を引くのかい？六道骸」

「彼自身に闘う意志がないのです。だから彼らの言いなりになるの  
は明白。なら、我々が戦うことは無意味だ」

「霧のボックスはどうする!」

「沢田がこちら側に落ちるならボックスは手に入れられても空けることが出来ないではないですか…」

「俺は行くぜ」

「獄寺。」

「聞こえなかったのですか? 獄寺隼人、無意味ですよ。これはボンゴレ? 世の解散宣言です」

「それは俺が決める」

「沢田綱吉とあなたでは力の差があります」



「確かにな。…だが、今回の件は右腕である俺にも非はある。十代目ばかり辛い思いを背負わして置くわけにもいかねー……………十代目を止められないかもしれないねー。下手すりゃ十代目にやられるかもな……………だが、十代目にやらねんら俺は本望だし、十代目にこんなことやらせてる奴らをぶっ飛ばさなきゃ、俺の腹の虫が収まらねー」

「うむー！同感だ！獄寺！」

「芝生…」

「俺はたとえ1人になっても沢田を救いに行くつもりだ！ファミリのピンチに、この晴の守護者が行かずして誰が行く！！極限！俺の拳で沢田の目を覚まさせてやる！」

「あははは！先輩、ツナ殴る気つか！？……………もちろん、俺も行くぜ…獄寺。操られてるツナだって、俺達見りゃなんとかなるかもだろ？」

「山本……てめー…考え方が軽いんだよ!」

「そうか？ボンゴレボスとそのボスを守る守護者達の絆はそんなもろくねーって！」

「キミって、そういう事サマッと言つとこあるよね」

「え・」

「てめえはどうすんだよ…雲雀…」

「何言つてんの？獄寺隼人。僕はまだ霧の属性集団も、沢田綱吉も噛み殺してない。行くに決まってる」

「骸…そういつことだ。お前が手を引くなら、俺達は止めはしない。」

「クフフフ…早死にしに行くつもりらしい。……いいでしょう。付きあいます。」

「行くのか？骸…」

「ボンゴレ？世とその守護者の崩壊…僕にとっては願ったり叶ったりの展開です。せつかくですからこの目で見届けさせてもらいますよ。」

「なんだとおお！！極限にプンスカだぞ！骸！」

「あははは！まあまあ先輩、いいじゃねーか！骸も参戦なんだし、心強いぜ」

「僕には関係ないからね。好きにしなよ」

「ランボさん、もう飽きたもんね〜。ツナと早く帰りたい!」

「決まりだな…これで本当に正真正銘」

“ボンゴレ？世守護者、全員参戦だ”

## 決戦

獄寺をはじめとするツナの守護者たちは暗く、先の見えない道を再び歩き出していた……

「獄寺、戦うのはいいが…極限沢田はどうするのだ？」

「そうだけ。獄寺、ツナの??バーナー（ダブルイクス）くらったら一溜まりもないって」

「前もって十代目の相手は決めておこう。それ以外の奴は迷わず霧のヤロー共だ」

「うむ…」

「OK!」

「で？誰が沢田綱吉の相手を？」

獄寺隼人の視線の先は……………

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

どうやらボンゴレ守護者共はバカばかりらしいな

ボスの沢田綱吉は我々の手に落ちたのいうのに、死に來たぞ

いいじゃん。最強ボンゴレの守護者をつちらの手で葬れたら格好良  
いじゃー！

六道骸もバカだったな…我々と組んでいればボックスも手に入り、  
沢田綱吉も葬れ、最強を欲しいままに出来たというのに……

来てるよ…ボンゴレ…

「おい骸、お前バカ呼ばわりされてるぞ」

「クフフフ…僕が口先の挑発に乗るとでも？」





「噛み殺されたいの？キミ」

「ぐびゅー！」

ボンゴレはいつから漫才集団になった

「“余裕”だと言ってもらいてーな」

ふーん

しかし、お前らの相手は我々ではない

「「「「「?」「」「」」」」

「あ~~~~~!!ツナ~~~~!!」

ランボはツナに駆け寄っていつてしまった…

「あ！ランボ！」

「あんのアホ牛！」

『……………』

「ツナ〜〜！どこ行ってたんだよ！早く帰るもんねー！」

「ツナ……？」

『……………』

「なんか言えよー！ツナ〜」

『……………』

『シネ』

「…!」

「…!」

「アホ牛が！十代目は操られてるって説明しただろーが！」

「しかし、決まりですね」

「ああ…ツナがランボに手を出すなんて有り得ねー」

「今の沢田は沢田ではない!!」

「行くぞ!」

瓜！形態変化だ（カンビオフォルマ）

次郎、小次郎！カンビオフォルマ形態変化いくぜ

我流！カンビオフォルマ極限！カンビオフォルマ形態変化だ！！  
ロール、カンビオフォルマ形態変化



舞え、ムクロウ。形態変化カンビオフォルマ

ギュードーン!!  
形態変化!! (カンビオフォルマ)

ほお…流石に守護者全員は壮観だな

「だろ？」

「あははは！まーな！」

「うむ！俺達も久しぶりに見たぞ！」

「芝生それは言うな」

「クフフフ…しかとその目で焼き付けておいてもらいたいですね」

「君らは「こ」で、噛み殺されるん……だからっ！！」

雲雀のセリフと同時に、全員の一斉攻撃となった

沢田綱吉の相手は……

「頼んだぞ！雲雀！！」

雲雀恭弥が沢田綱吉の相手だと？

雲が大空を相手にするといふのか？！

無理でしょ！絶対

あの男、死ぬな

「そいつはどうか…」

「負けねーさ。雲雀は…たとえ、ボスでもな！」

「極限！あいつは、雲でも」

「大空すらも隠す入道雲ですからね」

「……………キミと戦えるこの時を楽しみにしてたんだ。沢田綱吉」

『……………』

「いいね…その殺気」

『雲雀恭弥……』

「はじめようか……沢田綱吉……」

## 滞る雷

俺の相手は…晴か。

「ランボさんもいるもんね！」

「そうだな、ランボ！極限！晴と雷の最強タッグを見せつけてやるぞー！」

「やるもんね！」

そんなガキになにができる。

「ランボをただのガキだと見ている時点で、霧の属性集団の目もし



れてるな！」

なに？

笹川了平が取り出したのは……10年バズーカ……

「ランボは、ボンゴレ？世、雷の守護者だ！」

「ぐびや？……」

ボンツ！！

「??はい？」

「よお！大人ランボ！」

「笹川氏？これは何事ですか？」

「話は後だ。沢田が危ない。あの男を倒すぞ」

ランボの表情が変わる

「ボスが？」

あのガキが大人に………どういうカラクリだ

「極限！了平イリュージョンだ！」

くだらん!!

バチ

っ?!……イナズナが

「笹川氏がボスが危ないと言った……お前が関与してるなら、加勢  
しないわけにはいかないんでね」

なるほど……確かに、ただのガキでないことはわかった。

「やれやれ……戦いたくないんだけどなあ」

「そもそも言ってもらえん！行くぞ！ランボ！」

……

『俺の相手はこいつか…』

私の相手は…嵐ですか…

「不服か？」

いえ、逆です。“元”ボンゴレ？世の右腕とお手合わせできるとは

「“元”とは言ってくれんじゃねーか。挑発のつもりか？十代目が居る限り…俺は永遠に十代目の右腕だ」

たとえ、沢田綱吉に自我がなくても？

「?!……………いや……………自我はある。ボンゴレボスをなめんじゃねー」

強がりな……沢田綱吉はもうこちら側だ。

「……だったら尚更、「俺達」は戦わなきゃならねえ。」

………？

「分からねーだろうな……てめえらみたいなのは……元々、俺達はバラバラだ、ボンゴレにいる理由がな。一致団結なんて、この方やつたことねーよ。終いにゃ、ボスの身体乗っ取るだとか、噛み殺すなんてほざく奴らまでいやがる。」



「だから、強いんだ…俺達は」

？！

「だがな………」

………

?!.....この男の炎は...ヤバい!

「.....おっ?.....獄寺の炎だな?ビリビリするぜ!あいつすげーな!」

随分と余裕だね

「あははは！まーな！  
“余裕だぜ……”」

?!…………ムカつく奴……

「あははは！敵とてはよく言われる」

キリ雨の守護者でしよ。

「ああ。山本武だ！よろしく頼むぜ」

バカな奴だな。どうせ沢田綱吉は帰って来ないのに…

「分かんねーぜ？そんなの」

分かるよ。沢田綱吉はもう僕ら側についてしまったもん

「あははは！ツナはそこまでヤワじゃねーさ。ボンゴレ？世の名は伊達じゃないぜ」

仮に、自我が戻ったとしても…一度仲間に手をかけたんだ。沢田綱吉がボンゴレに戻るとは思えないな

「へえ…ツナのことまあまあ調べてんのな。確かに！そちらさんの言っとおりだ！…けどな、お前ら、ツナのことばっか調べてて、“俺達”のことは何もわかってねーな…」

何だと？

「けど、まー！俺ら根っこバラバラだから調べても仕方ないか！

……他の奴らは分からねーけど、俺は、“ツナがボス”だからボンゴレにいる。ツナがボンゴレに居なくなるってんなら、俺は居てもしょーがないからな」

じゃ意味ないじゃん。沢田綱吉はもうボンゴレじゃない。

「だが、“俺達”は此処にいる。……俺は、今、ボンゴレ守護者の使命として此処にいるんじゃない。ツナは大切な“仲間”だから、此処に来た！」

仲間？

「ツナは大切な友だからな！ダチが道迷ってんなら、探しに行かないやだろ？」

そんなダチは君らに攻撃したんだよ？



「ツナはそんなことしないからな。操られてるって分かってんならやることは一つだ！」

無駄だよ。操られてんのを解こうなんてのは

「まあまあ。お話はここまでだ。……………これでもかなりキレてんだぜ……………」

……山本武……スクアーロに続く剣帝と言われてる男か……

……

どういふことだ?!この雷の守護者!

「やれやれ……口で言うほど大したことないなあ」

「やるではないか!ランボ!」

くっ!!なめるなよ!

“霧風”

「構築”を特徴とする霧が、俺の“硬化”には勝てないさ……」

“いかずちの盾”

「おお！ランボ！新技ではないか！」

くそっ！俺は！霧の属性集団“シオン”だ！負けなんてありないんだよ！

「「？！」「」

霧奥義“深山幽谷”

『山本が未来で戦った幻騎士とかいう奴の技に似ている』

「笹川氏~~~~！ど~~~~し~~~~よう~~~~」

「怯むな！ランボ！極限！頭を使うのだ」

「って、一番出来ないじゃん！」

『確か、骸が前に霧の術士相手に対策的なことを言ってたような…』

…』

## 回想

「相手は霧の術士、まともに向かっていっては相手の思うツボです。」

「…五感を奪われる」

「その通りです。獄寺隼人、術にかけられたということは、五感を司る脳を支配されるということ」と

「何か手はないか！骸」

「………そうですね。まず雲雀恭弥ですが、彼は微かながら、未来

の世界で霧の力も見せている。つまり、霧波動を微量ながら持っているということ。奴らの霧から防御くらいは出来る可能性があるります」

「そんなもの（霧の力）必要ないよ。僕は僕で彼らを噛み殺す」

「やれやれ…そう来ると思いましたよ。まあ、雲雀恭弥に関してはまず問題ないでしょう。次に山本武」

「ん？」

「霧の術士とは何度か手あわせているはず」

「おう！霧対策は万全だぜ！！」

「あとは、獄寺隼人と笹川了平ですね…」

「情けねえが…今の俺には霧に対抗する術がねえ」

「うむ…こっちは直接攻撃型だからな」

「ですね…霧の術士から言わせてもらうと、物理的攻撃型の相手ほど恰好のいいエサはありませんから」

「極限に何かいい手はないか？骸」

「難しいですね…とりわけ笹川了平。あなたは単純過ぎます…今回の戦いかなり不利です」

「何?! ！極限にハッキリ言ってくれな!」

「戦線離脱したら?」

「涼しい顔して何言ってる雲雀!」

回想終了

「……………」



「笹川氏……?！」

「ランボ」

「???」

「極限にまっすぐいぞ」

「え?!」

「骸のアドバイスは極限に役に立たなかった」

「どうすんの?!このままじゃ俺たち、この訳わかんない森から出れないじゃん!?!」

深山幽谷の脱出は不可能……俺がやられない限りな

「もう嫌だああ!」

「落ちてランボ、ようは奴を倒せばよいだけの話だ」

だが、この霧の幻覚で造られた深山幽谷からどうやって俺を見つけて出す？

「くっ」

「笹川氏くっ！」

さあて……どっちから殺そうか……

「笹川氏〜!! なぶり殺しだよ〜!!」

『極限どうする……ランボは完全に冷静さを失ってしまっている……データラメに出ても奴の思いつば……。それに、俺のV.Gは相手の攻撃を受ければ受けるほどその力をフルに発揮する……向こう側から攻撃して来なければ膠着状態が続く……それは避けたい。』

「もう我慢出来ない〜!!」

「ちょっと待て!! ランボ! まだ10分も経ってないぞ!!」

「サンダーセット! ver.V.G」

「待て待て待て!! ランボー!!」

「コルナフルーミネ  
雷の角！！！」

バチツバチツバチツ！！

無駄だ。いくら雷の攻撃といえどその程度ではこの深山幽谷の森からは出られない

「…ぐっ…ランボ！極限俺を殺す気かつ！」

「ダメだもんね…よしもう一回」

「やらんでいいわ！俺まで巻き込んでどうする！」

「だってえ〜じっとしてらんないもんね！」

「気持ちは分かるが落ち着け……俺まで巻き添え食われたのでは…」

『?!?!………そうか………その手があるではないか?!?!』

「笹川氏？」

「ランボ！前言撤回だ！俺に構わず、攻撃を続ける！」

「え?!！」

今度はこっちから行くぞ………

「貴様に攻撃の際は与えん！ランボ！急げ！」

「け、けど、笹川氏！」

「構わん！行け！」

「コルナフルーミネ  
雷の角！！！」



「コルナフルーミネ  
雷の角！！！」

「ぐっ…まだまだああ！ランボ！」

雷砲！！

『くっ！！さすがは秘められた雷撃を持つ雷の守護者だな…ランボ  
！！極限に効いているぞ！！』

雷コルナフルーミネの角からの……………雷砲！

「…」

どういつつもりだ。笹川了平……………言っているだろう。その程度で深山幽谷は破れない。

「俺は、極限……頭が悪い……からな……突っ込んでいくことしか知らん  
！」

「さ、笹川氏……」

「攻撃の手を……止めるな！ランボ！」

こ、雷の角！  
コルナフルーミネ

くっ……なんて凄まじい……

『よし！これだけの電気が張り巡らされたんだ……相手も気が気で  
ないはず！！』

こっちもあと一発といったところだな……』

「いけランボ！一番デカいのを食らわせてやれ……！」

電撃鉄の角フェットロ・コルナ・エレットロ・シヨック!!!

「ぐあああつー!」

『どついうことだ…笹川了平は…明らかに奴自身にもダメージを負っている。』

その身体で深山幽谷の中にいる俺と戦うなんて、不利なのは明白』

出れなくて残念だったな、笹川了平……まあ、これだけ凄まじい雷を放出するのは流石だと誉めるがな……

「さ、笹川氏……」

「心配……するな……ランボ」

「?!」

「シオン、と言ったか…俺は、晴の守護者だ…その使命は…」

逆境を己の拳で砕き、ファミリーを明るく照らす日輪だ

……それが？

「俺には、この拳しかないってことやね」

行くぞ!!



晴のV.Gフルチャージ!!

極限<sup>マキシマム</sup>サンシャインカウンター!!!

ぐ・おおおおおおああ！！！！

なんだそれはああ！！！！

ドオオオン

くっ!!.....どこにそんな、力が.....

「これが俺のV.Gだ。相手の攻撃を喰らえば喰らうほど、炎エネルギー

ギーのチャージしてぶつけることが出来る」

…そうか…雷の守護者に、攻撃させて…深山幽谷を脱出、と見せかけて…自身の炎をチャージしていたのか…

「ああ。ランボの“硬化”の雷を何発か喰らってれば、お前もただでは済んでないだろうしな」

布石……だったのか………

「行くぞ……ランボ」

「あいついいの？笹川氏」

「気絶している。目を覚ましたとしても、戦っだけの炎もないだろ  
う」

「あれ？そついえば俺、5才児の俺に戻んない。」

「俺が使った10年バズーカは、入江正一から受け取った“5分効  
果の壁”を取っ払った新作らしいぞ」

「え・じゃあ何、俺しばらくこのまま？？」

「ああ、極限！共に沢田を助けに行くぞ！！」

「いやだああああ！！！！」

雨の守護者 vs 霧の術士セラス

?!! シオン兄…………

「ん？どうかしたか？」

…ボンゴレの守護者って…みんな、強いのか？

「まあ、なんてったって、マフィアだからな!!」

キミそつには見えないけど

「だろ？俺もそつ思っ」

？



「ガラじゃねーことやってんなあ〜って思うね」

「じゃなんでボンゴレ？世の雨の守護者なんてやってんの？」

「仲間を守るためさ」

「仲間？沢田綱吉？」

「ツナだけじゃねーさ！他のみんなもな！」

「他の守護者も強いんでしょ？守る必要なんてなくない？」

戦いを清算し、全てを洗い流す鎮魂歌の雨

どうしよう？

「戦うって、得られるものたくさんあるけど…失うものも同時にある。俺は、仲間の…何か失った時の辛い顔は絶対見たくねーんだ。俺は、仲間に辛い顔させないために…俺自身も、悔いのない戦いをするために…それはすなわち、全力で仲間を守ること。戦いを清算

すること。それが……雨の守護者である俺の使命だ……」

……。

「だから俺はお前らを許さねー。」

?!

「ツナのあんな辛そうな顔をさせた、いや…ツナだけじゃねーな…俺の仲間みんなを苦しめたお前らは、絶対に許さねー！」

じゃ……………ヤルかい??この僕を

「……………」

時雨蒼燕流特式十二の型左太刀“霧雨”

『?!はせい!……けど』

よけられる速さだよ。山本武。

だが、霧雨の刃の1つが、敵の腕を掠めた…

「…………名前」

？  
？

「名前なんていうんだ？」

そんなの聞いてどうするの？

「戦った相手の名前くらいは知っておくさ」

知ってもどうせしょうがないじゃん。  
今日がボンゴレの最後なんだからさ

『?!?!風か!』

“霧の突きの舞”

「.....。」



時雨蒼燕流功式八の型  
“篠突く雨”

ドレミ！…！

ちっ！  
“霧の眩暈の舞”

.....

『なんもないな……』

「どうした？不発か？」

目に見えるものだけを造り出すのが霧の術士ではない……

『…』

なにか匂わないか？

『…』

遅い

“霧の突きの舞”

シュツシュツシュツシュ

トバンッ！

けたたましい音とともに土埃が舞う……

「ゴホッ！ゴホ……痛ッ！」

霧の眩暈の舞は、目に見えない嗅覚を利用し…脳をジワリと支配していく……一度この匂いを嗅げば、もう逃れはしないぞ

『やべな……これは……視界が……揺らぐ……頭が……いてえ……』

「……………。へへへ！そうだな…次郎、小次郎…」

「」

「?!」

「」

ザア……………

?!!……………雨……………?

「…危ねえ！危ねえ！俺は、雨の守護者だ。こんなカラツカラの渴ききった地じゃ、俺自身も渴ききったまじとこだった！」

『???何を言ってるこの男』

すでに視覚も、聴覚も五感はほぼ支配されているはず……………なぜ…

……………笑ってられるっ!!!!

山本武!!!

時雨蒼燕流特式十二の型右太刀“斬雨”



ドジュッ！！！

？！！なっ……に！！

な……なぜ！！攻撃が出来る！

「最初に放った左太刀“霧雨”……ありや攻撃したんじゃない、  
霧相手のための下準備だ。」

何???

「俺のボックス兵器は2匹いてな！まずは雨犬、つーか秋田犬“次郎”こいつはすげー鼻が効くんだ！霧雨は、次郎が相手を嗅ぐために放った」

?!!

「……そうか……僕は微かとはいえ、奴の最初の斬撃に触れた……奴のボックス兵器が僕の位置を把握出来るわけか……」

「あとは、次郎“達”に任せるだけだ。たとえ…俺が使いもんにならなくなったとしてもな！」

ちっ！

「“舞台”も整ったしな！！」

スウツ…

何?!!

『目を瞑った!!だと?!』

……るなみ……っ!

なめるなよ!!!

山本武!!!

霧の死の舞!!!

バシヤ!

時雨蒼燕流守式式の型  
逆巻く雨

ザアアアン……………

『クソ！！水がっ！………水？………？！！しまった！』

「気づいたみたいだな………だが、遅いぜ………小次郎！」

時雨蒼燕流特式十の型  
スコントロ・デイ・ローンディネ  
燕特攻！！！！

サバアアアアアン！！！

『……………この男……………霧の術士相手の戦いに……………慣れてやがる  
っ！』

「こいつが2匹目のボックス兵器、雨燕“小次郎”だ。地に雨を降  
らせ、俺の戦い”をさせてくれる。」



.....。

「最後にもう一度聞かせて……名は？」

「……セラス……」

「……そうか！久々にゾクツとした戦いだったぜ！サンキューなっ  
！」

「……ヤッホ」

「ん？」

「ま……け……たんだ……殺し……て……い……け……」

「俺はお前らを殺しにきたんじゃない。ツナを助けに来たんだ。それ、」

“女”に手を出す訳にはいかねーだろ

『?!……気づいて……』

「お疲れさん！次郎、小次郎！  
……さて、他の連中はどうしたかな。」

## 怒涛の嵐の守護者

『ちっ！どいつもこいつもサラッと終わらせやがって。雲雀のこと考えてんのか？』

しかし、そう語る嵐の守護者…獄寺隼人の足元には、対戦相手の霧の属性集団の1人がころがっている……

「まっ。人の事言えねーか……」

『何なんだ…この男…聞いてないぞ！！ボスから聞いていた要注意人物は…霧を操る六道骸とボンゴレ最強の守護者、雲雀恭弥のみだった！！…話が違う！』

「?!なんだ。まだ息があんのか。タフだな…手加減はナシだったんだけどな…」

……っ！貴様！嵐の守護者…獄寺隼人だろ…

「ああ。」

ぐっ！……クソ！聞いて…ねーぞ！ボスからは…六道と雲雀のみを…マークしておけ、と…言わされて…たんだ！

「はっ！なめんじゃねー。俺はボンゴレ？世の右腕だ…負けは許さ  
れねーんだよ」

ぐっ！

常に攻撃の核となり、休むこと無い怒涛の攻撃

「これが…俺の使命だ。周りの奴らが決着つけてきてんだ。俺だ  
けチンタラやってられるかよ」

何故だ！なぜ！……霧の幻術が……効かなかった！！！！

「ああ？なんだてめえ、気付いてねーのか。俺は端っから、てめーなんか見て戦ってねーよ」

？！なん……だと……

「俺のV.Gには、ターゲット的まで飛距離を測るサングラスがついてるが、今回ばかりは少し細工して通常より視界視野を半分以下した。」



半分以下……だと?!!

「ま、ほとんど見えてねーわ!」

そ……れで……どうやって……

「“相棒”とだ」

!!

グルルルルルルルウウ

?!!

静寂な空気から微かに聞こえてきたのは、獣のうめき声だった……

ダンッ！……！

ガアアアアアア！……！

なっ！！

「俺のボツクス兵器の嵐猫の瓜だ。」

『でかい…』

「通常はもつと小さいせえ子猫だ……以前までは、晴の守護者の“活性”の炎が無ければ、デカくすることが出来なかったが……まあ、いつでも晴の守護者が側にいるわけでもねーからな。俺の力で、始めからデカくすることは出来ねーかって策をねったんだ」

獄寺はそう語りながら、身体に寄り添う瓜の狭い額を撫でる。撫でられた巨大な瓜はとても嬉しそうだ……

「“ある理由”で、俺には嵐以外に、雨、晴、雲、雷と……他の属性の波動を持つてる事に気が付いてな……もしかしたら……って思ったら案外出来たって訳だ。」

そう……獄寺は未来の戦いにおける修行で、10年後の獄寺隼人自

身の武器である“スイステーマC・A・I”の解読の結果、自分には、嵐以外にも4つの波動を持っていることに気が付いたのだ。

「とはいえ、あん時はそれぞれの波動を出すためのリングがあったから簡単に出せたが…今回は嵐のリングで他の属性の波動出さなきゃなんなかったから苦労したかな……」

だが…納得できない！その嵐猫を付いているとはいえ…我々霧の属性集団の…霧の幻術から免れる…方法など…！

「まあ、瓜も多少攻撃はさせていたが、こいつは大体、お前の位置を俺に教えてただけだ」

なに?!お前は、視界ほぼ0のはず!!!

「ああ。だから風をよんだ」

か…ぜ…だと?

「瓜の巨大な炎の動き、におい、声、風向き、これらを感知し、総

計して位置を把握し攻撃していた。」

『なん…という…信頼の上のコンビネーション……いや…驚くべきは、この男の緻密に計算されつくされた……戦闘センスか……味方の風をよむとは……嵐の守護者と呼ぶに相応しい……』

「もう一つの鍵は、“雨の属性”だ」

なに？



「攻撃の際に雨の属性の炎を埋め込んで攻撃した。そして、雨の属性の性質は“沈静”だ」

?!!

「……………気が付いたみてーだな。お前に直接当たれば儲けもん…仮に外れても、空气中に分散された雨の炎は確実に空間を沈静していく。」

お前が幻術をかけてこようが、幻術の陰に隠れようが…沈静された空間じゃ、完璧なお前の幻術空間とはズレが生じる…あとは、ズ

レの部分を攻撃すれりゃあボロが出るって訳だ。」

それは、未来のチヨイス戦で、雨の守護者山本武が、霧の術士幻騎士の幻術空間から幻騎士を見つけ出し、勝敗を分ける攻撃へと転じた作戦であった。

獄寺にとって…未来での激闘は、確実に彼の嵐の守護者としての…ボンゴレ？世の右腕としての器を大きくしたものだっただ。

10年後の獄寺隼人は、ボンゴレ？世の右腕として恐れられる存在になるが、今の獄寺隼人は確実に、10年後の自身へと近づいていた……

『なん……という……男だ……かな……わない……』

?!!

獄寺隼人は、絶望に打ちひしがれていた敵の霧の術士のすぐ目の前に爆弾（Bomb）をむけた……すでに導火線に、火は灯されている

ま……て……まで……

「言つたる……手加減ナシだ……」



「?!?!」

「獄寺! 極限無事か!!」

「獄寺氏~~~~~!!」

「山本! 芝生! 来んの遅せ……………?! なんでアホ牛10年後なんだよ……………」

「?!?! ひゃあっ?!?!」

「?!?! ……おいおい…獄寺……………」

「……うわっ……極限加減無しだな！」

「……ったりめーだ。お前らこそ、相変わらず甘めえな……」

「あははは！まーな！」

「だが、情けはかけておらんぞ！」

「ったく」

『……そういや、奴の名前聞いてねーな……まっいいか……』

「獄寺……とじする……」

「……………」

“骸の所に行くぞ”

雲雀恭弥という男

「クフフフ……」

何がおかしい……

「また貴方ですか……」

「霧の術士、アンジュだ……」

「また沢田綱吉に戦いを妨げられるのは遠慮しますね」

「安心しろ。今回は俺が直々に相手する……沢田綱吉の相手は、雲雀  
恭弥だ……」



「……まあ……ならいいでしょう。しかし、気になりますねえ……沢田綱吉と雲雀恭弥の対戦カードは」

「沢田綱吉はこちら側だ……雲雀恭弥の負けは確実だ」

「先ほどもいいましたが、雲雀恭弥を甘く見てはいけない」

「随分かっているな。お前ほどの術士が」

「雲雀恭弥は、ボンゴレ最強の守護者。

雲は、“如何なる天候”であろうと存在する。常に独自の立場を守り抜いてこそ、雲。」

「誰とも馴れ合い孤高の浮き雲」

「?!?!」

「独自の立場からファミリーを守る!」

「極限!それが雲雀の使命だ!」

「…獄寺隼人…山本武…笹川了平…これはこれは…守護者勢揃いと  
は」

「ちょっと…このランボさん完全に流したでしょ…今。」

「やれやれ…沢田綱吉がいらないと思えば、今度はあなた方ですか…  
僕は、一人で戦いを楽しみたいのですが」

「とつとと終わらせて十代目の所に行く」

「だな！」

「うむ。雲雀ばかりに任せる訳にはいかんからな！」

「雲雀恭弥の元には、沢田綱吉だけでない。我々のボスもいる」

「  
「  
「  
「?!  
「  
「

「クフフフ…やっとその名が出てきましたね」

「雲雀が好きそんな展開だな!!」

「あいつの思考は極限に理解出来んからな!」

「……理解出来ないのは貴様らだ。沢田綱吉もいる。我々のボスもいる。これだけ聞いて…なぜ誰一人雲雀恭弥の元へ行かない?!死ぬぞ。雲雀恭弥は……」

「あははは!俺たち雲雀のどこ行ったら逆に俺たちが雲雀に噛み殺されちまうよ!」

「？」

「沢田綱吉は雲雀恭弥に譲る」これが今回の策ですから

「はあ…その条件でないと雲雀のやろつ、今回の戦い自体出ないと  
言いかねなかったからな…」

「さつきも言ったであろう…雲は、誰とも馴れ合ってはいけない  
…たとえ、晴れであろうと雲は在るものだ」

「雨は、雲があるから降るからな！」

「……雷も。」

「霧が出よつと……」

「嵐になるつと……雲は“流される”事なく空にいらなくてはならぬ。雲には、常に過酷な状況がまわり付く……だが、それが雲の存在意義だ。雲雀の奴もそれはよく分かってんだ」

「過酷になればなるほど……強くなるだど?！」

「……………」

「だがな……雲が“自由に”浮いていられる訳」

“大空”が在るからだ

?!!

「クフフフ……さあ……自分の心配をした方がいい……霧の術士アン  
ジュ……」

「……っちいいい！……！」

『雲だけじゃねえ！  
雨だって！』

『晴れだって！』



『雷だって！』

『霧だって』

『嵐だって “大空” が在るから……………十代目っ！！』

「大空を頼む……ボンゴレ最強の雲の守護者、雲雀恭弥！」

大空VS雲

ガキンツ!!

ダンシ!!...ダンシ!!...!!

ガンッ!!!

ドバンツ！

『Xカノン』

『……………トンファーが削られている…沢田綱吉の炎は濃度が高い。かすれただけで“これ”か…』

「いいね…沢田綱吉。」

久しぶりだよ…こんなにゾクゾクする戦いは」

操られたボンゴレボス、沢田綱吉と対峙するのは、ボンゴレ最強の雲の守護者、雲雀恭弥である。ニヒルな笑顔で戦う雲雀とは逆に、沢田綱吉には表情がない。

眉間にシワを寄せ、祈るように拳をふるう……ボンゴレ？世の戦いの姿は微塵も感じさせなかった…

『超高速…？カノン』

「ロール、防御だ」

雲雀の言葉とともに、雲雀のボックス兵器雲ハリネズミのロールは無数の針を張り巡らせ雲雀の前に立ちふさがった。

ドンッ！！！！

バンッ！！



けたたましい音と煙が舞う……雲雀の前は何も見えない

だが、そんな雲雀の背後にはすぐ沢田綱吉が、オレンジ色の炎をグ  
ローブに灯し殴り込もうというところだ

「かかったね」

雲雀はトンファーからチェーンをだし、沢田綱吉の腕に巻き付けた

そしてグンツと自分のところへ引っ張ると、もう片方のトンファーは鋭利の棘に変え、構える…

沢田綱吉は引っ張られるがまま、構える雲雀に突っ込んでいく…このまま沢田綱吉が突っ込めば、雲雀のトンファーに串刺しなのは明白だった

ゲージシンメトリー！！発射スタンバイ！！

『 ?  
BURNER  
』

『 ?  
! !  
』

「  
ロ  
ー  
ル  
っ  
!」

ドゴオオオオン……

「……はあ……はあ……。フンツ……僕の攻撃を先読みして身構えてたのか……」

『ボンゴレの超直感……か。』

キュウウウ  
…

「?!……………  
ロール」

『ロールの防御と、トンファーに防御の炎を固めてなかったら……  
腕一本は持ってかれてたかな……………』

素晴らしい殺傷能力だと思わないかい？……ボンゴレ雲の守護者、  
雲雀恭弥君。



「???. . . . . 誰だい? . . . . . キミ。僕と沢田綱吉の戦いの邪魔するなら、  
まずはキミから嘔み殺すよ」

「私はシックファミリーボス、名をゼロと言います。安心して下さい。私はこの素晴らしいボンゴレ?世の炎を見たかったですか  
ら」

「謎の霧のボックスのためか……」

「おや……ボックスの存在を知っていたのですか」

「まあね…けど、興味ないな……僕は、キミと沢田綱吉を噛み殺しに来ただけだから」

「それは困りますね……沢田綱吉がいなければボックスが開くできない……」

「……じゃあ…まずはキミが相手になってくれるかい？」

「……残念ながら……あくまで雲雀恭弥君の相手は、ボンゴレボスですよ……」

『??(ダブルイクス) BURNER!?!』

「?!」



キュウウウ……キュウ……キュウ！

ロールは、倒れ込んでいる雲雀の髪を鼻先で一生懸命つつくが、雲雀は反応しない

「流石はボンゴレボスだ。たとえ最強の守護者といえど、沢田綱吉の最大の攻撃技を諸に喰らえば一溜まりもない」



クピイイイ!!

ロールは雲雀の前に立ちふさがり、針を逆立て威嚇している

「ボックスは見かけによらず威勢がいいですね……主人が倒れようと守ろうとするとは……炎がなければ……ただのハリネズミ……沢田綱吉、このネズミを焼いてやりなさい」

.....

「どうした！沢田綱……なっ！？」

シックファミリーボス、ゼロの目の前には沢田綱吉でなく、巨大な針だらけの球体だった

「なっ……んだ……これは……」

「沢田綱吉は……この中だよ……」

「?!雲雀恭弥!!生きていたのか……有り得ない……沢田綱吉の最大の攻撃技を食らって。」

「この球体は……僕の残りの濃度の高い炎で造った密閉空間だよ……沢田綱吉が最大の攻撃技を放ったとなれば、炎はほとんど残っていない。なら、この球体からの脱出ほぼ不可能」

「?!わざと、??BURNERを誘ったのか!?!」

「沢田綱吉に少しでも殺傷能力の高い炎が残されてたんじゃ……この球体は壊されるからね……あとは、彼に雲の手錠を手足につけてある。……しばらく彼には、この戦いの行方を球体の中から指くわえて見てもらうよ……」

「……なんて男だ……沢田綱吉とのこれだけの戦いの中で、これだけの炎を残し、しかもボンゴレボスの最大の攻撃を受けてもなお……立ち上がりボスを完全に抑えている……まさに……最強!!!」

「しかし雲雀恭弥、自身の姿を見て下さい。沢田綱吉との戦いで身体も、炎も無いに等しい…それでこの私を前にして、貴方はまだ戦うというのですか？」

「……………」





「何言ってるの？キミ。当たり前でしょ……」

そう…笑いながら雲雀が取り出したのは…  
1つのリングとボックスだった……

「なんだ……あのボックスとリングは……」

ボウ……

『なに?!あの炎……インディゴの炎だと?!!』

『?!』

カチッ  
…

「ぐっ……なっ……なんだ!!」

「攻撃がっ……見えない!!」

「クス………どうしたの？鳩が豆鉄砲喰らったような顔して」

『ちっ！どうなってると！攻撃が見えない！！』

「ぐあっ」

「クスクス……なかなか、人を欺くのも悪くないね……」

『?!?!……まさか……まさか……この男……?!?!』

霧の幻術を使っているのか!?!?

霧やっぴ…

『この男…霧の幻術を使っている!?!』

「気が付いたみたいだね」

『?!?!』



「驚くことはないじゃない？キミ達だって、僕に微量の霧の波動があったことは、知ってたんだろ？」

「ああ…知っていたさ。だから我々はキミにも目をつけていた。雲雀恭弥君。しかし、分からない！常に独自の立場を貫き通してきたキミが……他の属性の炎を使って戦うなんて……しかも、霧……」

「……………」

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

「わざわざ呼び出すなんて、何だい？沢田綱吉」

「あ…えっと…雲雀さんに受け取って欲しいものがあった」

「？…リングとボックス…」

「ボックスは雲なんですけど、リングは、霧属性のBランクリングだそうです。この間、ミルフィオーレの百蘭から貰ったんですけど……」

「霧属性のリングなんて知らない。六道骸に渡せばいいじゃん」

「あ…ほら！雲雀さん、未来で霧のリング使ってたから、波動…少しでもあるなら、役に立つかな？って…」

「未来の僕が何考えてたのかわからないけど…霧は嫌いなんだ。いら  
ないよ」

「雲がいなくなってしまうっては、嵐も、雨も、雷も、霧も、起こり得ません。

晴だって！雲があるから際立つんですよ？！……雲は、天候を左右する大切な要です」

「……だから？」

「えっと……だから……」これは俺の見解ですけど……雲雀さんは、  
雲は」

“絶対倒れてはいけない”と思っています

『?!……』。“倒れて欲しくない”じゃなくて、“倒れてはいけな  
い”……か。』

「沢田綱吉、プレッシャーでもかけてるの？」

「えっ！そ、そんな！滅相もない…ですよ  
…で、でも！雲雀さんは倒れてはいけないから、たとえ…みんなが  
…俺が倒れても、雲が在る限り、可能性はあるっていうか…生まれ  
る…っていうか…」

「……………」

「雲雀さん、俺、約束します。」

雲が最後まで在る限り、大空である俺は、決して倒れません。雲が、立って居られるように……

『?!』

「けどもし、大空の俺が倒れた時には」

雲が、大空をつぶしてくれて構いません。

「……………」

「雲である雲雀さんには、その資格があると、俺は思っています。だから…雲雀さんは俺が居る限り、決して倒れないで下さい。その



ためなら、如何なる手段を使ってもいいと俺は思っています。俺も、雲雀さんが最後まで立っている限り、如何なる手段を使っても立ち続けます……」

「……………」

「……………」

「沢田綱吉にしては、面白い話だね……いいよ……別に」

「?!」

「ふん…」

「はい？」

大空がいなければ、雲は漂ってはいられないからね……

「あはは！……肝に銘じておきます」

××××××××××

「……………」

「沢田綱吉…球体の中で静かになってしまいましたね……死にましたか」

「どうかな…中は密閉空間。酸素も薄れていくからね……命の保証は出来ないな」

「殺すつもりですか…自分とこのボスを」

「そういう約束なんだ」

「何?!」

「大空が消える時…それは、雲に喰われた時さ」

『この男……本気で、沢田綱吉を殺す』

「さあ、お喋りはこのくらいでいいかい？戦いの最中のお喋りが一番嫌いなんだ」

「しかし、正体が霧の幻術と分かれば……あとはこちらの分野です」

「どじかな……」

カチッ

『また霧幻術……だが……よけられる！』

「なっ……になが」

「ぐっ……になっ?!」

『?!!』

ブスッ



「見えないかい？…じゃあ、見せてあげる」

『…この…針は…！』

雲の針が無数に散乱し、雲ハリネズミロールは巨大な球体になり、ゼロの背中をとらえている

「面白いだろ？僕も霧リングを使い、雲と霧の波動を混ぜて雲のボックスを開けるとどうなるのか分からなかったけど…まさかロールが幻覚で消えるとはね……」

「うぐ……………!!」

「ロールにはキミの死角から狙わせた。急所だから動いたら死ぬよ。」

「よく……こんな……巨大な……ボックス……ムーブメントを……その、  
身体で……」

「生き物としての格をキミ達と一緒にしないでもらいたいな」

.....

「.....。」

「み.....じと.....だ.....雲雀.....恭.....弥.....」

「.....  
トシ.....  
トシ.....  
トシ.....  
トシ.....」

『なんだ………終わった感じが、しない。』

## 破壊

「あいつは……死んでいる……しかし、なぜ終わったという感じがしない……」

雲雀は、今まで以上に神経を研ぎ澄まし、そして、沢田綱吉が中にいる針の球体をしばらく見つめて動かない。

「雲雀！」

「……………」

「大丈夫か！？雲雀……」



「誰に向かっていってんの？山本武」

「しかし雲雀、極限ボロボロではないか！..」

「しんせうし」

「だが…やったんだな？」

「ああ」

「沢田綱吉はどことですか？」

「あの中」

『げ！出たよあの球体』

『10年後の雲雀が、十代目を閉じ込めて限界まで持っていていかせたやつか…確かに、あれなら十代目を抑えてられるだろーが………ま

さか…10年後でもないこの時代のこいつがやるとはな…』

「雲雀！早くだせ！十代目のお身体が危ねーだろうが！」

「まだだ…」

「は？…」

「極限に何を言っているのだ！雲雀！」

「ツナまじで死ぬって！」

「これ以上やっても無意味ですよ」

「そんじゆじゆぢやな」

「？」

「奴は倒した…けれど…さっきから…終わったと感じられない…」

「極限どういうことだ？雲雀」

「分かんねーのか！芝生………雲雀が、まだ“なんかある”って言うってんだよ………」



ド  
ン…

「なななに?! なんなの?! 獄寺氏~~~~~!」

「引っ付くな! アホ牛!」



「球体からだぜ!!」

「何なのだ!雲雀!」

「.....」

— ∪ —

— ∪ —

『どういふことです。沢田綱吉にはもう、あの球体を壊すほどの体力など残っていないはず……』

……

『球体が……壊される』

バンツツ!!

『おや……今度は守護者勢揃いですか……愛されていますね……ボンゴ  
レ世』

「……………」

『まあ……もう彼自身は、いませんがね……』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4318v/>

---

10代ボンゴレファミリー解散？！

2011年10月28日15時06分発行